

特別支援学校における教育実習改善の基礎的研究(1)

— 教育実習担当指導教員へのアンケート調査から —

池 田 浩 明 小 川 透 武 石 詔 吾

Abstract

Our research is aimed at revealing the supervising teachers' attitude towards enhancing and improving our practice teaching at schools for special needs education. In order to collect data, we conducted surveys among supervising teachers who have taught as part of the practice teaching. The following three points were identified: 1) most of the supervising teachers who taught in the practice teaching class have a sense of fulfillment in their work, 2) a considerable amount of the course is spent in teaching student teachers how to get involved with or relate to children and how to understand them as well as on how to prepare lesson plans, 3) supervising teachers feel it would greatly benefit student teachers if they were taught prior to taking the practice teaching the characteristics of the various disorder likely to be encountered as well how to prepare lesson plans.

1 はじめに

本学の人間生活学部保育学科(以下「保育学科」)では、幼稚園教諭一種免許を基礎資格にして、平成 13 年度から特別支援学校教諭一種免許が取得できるようになった。その意図について本学の「障害児教育実習の手引き」の「はじめに」の冒頭に、「(前略) 保育士、幼稚園教諭の職に就いたとき、統合保育であれ障害児保育であれ、個々の障害児に対する保育が十分に行える知識と能力をもってもらいたいという願いからです(後略)」と述べられている。こうした意図に基づいて特別支援学校の教育実習が始まった。平成 13 年度から平成 23 年度における保育学科在籍者の中で障害児教育実習を行った各年度の学生の割合を図 1 に示した。

この 11 年間における保育学科在籍者の総数は 870 名で、そのうち障害児教育実習を行った学生は 423 名であり、在籍者に対して障害児教育実習を行った学生の割合は、48.6%であった。保育学科在籍者の約半数に近い学生が障害児教育実習を行っている。しかし、学生が障害児教育実習にお

いて実習前にどのような意識をもち、実習中・実習後でどのように意識が変化したか等に関する調査はこれまで行っていなかった。

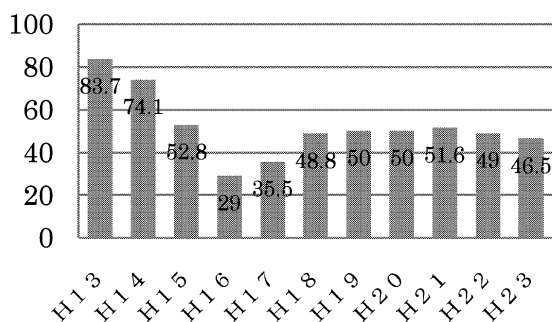


図1 保育学科在籍者に対する障害児教育実習者の割合

そこで、池田ら(2011)は、障害児教育実習の指導及び大学の障害児教育実習にかかわるカリキュラムの改善・充実を図ることを目的に、平成 22 年度、「特別支援学校の教育実習における学生の意識について(1)～実習生の「期待」・「不安」・

「成長」に関するアンケート調査～」を実施した。この調査研究の結果によると、学生たちは、実習前では「期待と不安」を持ちながら実習に臨み、実習中は「悩みや困ったことを感じながら楽しみを見出し実習を遂行し」実習後には「満足感」とともに「実習を通して成長したことを実感した」ということが示された。さらに、こうした結果から特別支援学校における障害児教育実習は前述の実習の意図からも有効な場であることが示唆された。

平成 19 年度以後、特殊教育から特別支援教育へ移行し、「個別的教育支援計画」の作成が義務づけられるようになった。その出発点が乳幼児期に位置づけられている。そうした状況から特別支援教育に関する履修や障害児教育実習で得た様々な知見は、乳幼児及び障害のある乳幼児の保育に当たって役立つものと考えられる。

2 問題の所在と目的

山田 (2009)、高谷 (2004) は、一人の現場教員の立場から教育実習生に対する考えを述べている。山田 (2009) は、中学校で特別支援教育を実施する観点から、実習生に対して教科の専門性を身に付けることとともに、特別支援教育の知識理解とボランティア体験の大切さを指摘している。高谷 (2004) は、養護学校での教育実習生への指導では、授業づくりにおいて実習生に精一杯考えさせるために支援することが大切であると述べている。

特別支援学校の教育実習を担当した教員への調査研究としては、平田 (1980)、天野ら (1999)、坂本ら (2009) がある。平田 (1980) は、実習担当動機や条件などについてアンケート調査を実施した。実習担当動機については当番の為と答えたものが半数と多いが、自分自身の勉強になるという項目を選択したものが 2 割ほどいることが示された。養護学校教員の条件としては子どもに対する愛情や忍耐力を選んだものが 6 割以上いた。事前に教師として身につけてほしい項目として、指導案の書き方、心構え、専門知識、教育理念があげられている。天野ら (1999) は、大学や実習生への要望について自由記述形式による質問紙調査を実施した。大学への要望としては指導案の書き方や教科の内容について、さらに授業の基本について指導してほしいことがあげられている。実習

生への要望としては、教育への姿勢や自覚・態度についての記述がみられた。坂本ら (2009) は、実習生に対する指導は指導教員に任せられ、検討が十分でないことから指導案指導と授業反省会を取り上げ、実習生に対する指導内容について検討した。その結果、初期の段階では目標について、次の段階では具体的な内容について指導することが効果的であることが示された。

一方、磯崎ら (2002) は、通常の中学校と高等学校の理科を中心とした教科的教育実習に関してではあるが、国立大学の指導教官に対して意識調査を行い、指導教官自身が実習指導を通して専門的成長の機会と捉えていることを示した。

以上のことから、実習指導が指導教員自身として意義あるものと捉えられていること、実習生に対しては指導案作成や教師としての姿勢などを求めていることが示唆される。しかし、坂田ら (2007) は、障害児教育実習に関する研究は、数の少なさとともに大学側からの視点によるものが多く、実習校の校長、指導教員等の関係者を対象とした研究は、ほとんど見られないと指摘している。坂田らの研究も特別支援学校からの研究ではあるが、教育実習生を対象に調査したものである。このことは、障害児教育実習に関する実習校の関係者から実習に対する意見・要望を取り入れて障害児教育実習及び大学のカリキュラムの改善・充実を図る上からも課題があると思われる。

そこで、本研究では、指導教員の意識を明らかにし、今後の障害児教育実習の指導とともに大学における特別支援教育に関するカリキュラムの改善・充実に資することを目的として、実習校の校長、指導教員を対象に教育実習に関するアンケート調査を行った中から、実習生を直接指導した指導教員からの回答結果をもとに検討した。

3 方 法

保育学科の 40 名の学生が障害児教育実習を行った 17 校の特別支援学校の指導教員 40 名を調査対象とした。

自由記述できる一つの質問と 4 項目から 11 項目の選択肢から 3 項目を選択する 4 つの質問からなる「調査票」を指導教員に配布し記入することを校長に依頼した。指導教員 40 名中 29 名 (74.3%) からの回答があった。多選択法による結

果は、集計後その割合を％で表記した。自由記述回答の結果は主な事項を掲載した。

4 結果と考察

(1) 「実習指導の充実感」

指導教員が実習生を指導した際、どの程度の充実感を得たかを示したのが図2である。

「かなり充実感を得た」と「少し充実感を得た」を合わせると96.6％であり、殆どの指導教員が「充実感」を得たと回答している。

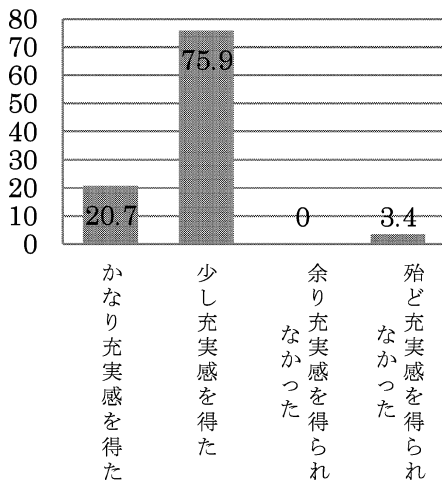


図2 実習指導の充実度

このことは、教師としてとして後輩を育成しなければならぬことや教員生活において実習生の指導を担当する役割等の意識や使命感によるものと思われる。さらに、実習生を指導することが自己の教育を振り返る機会となったためと考えられる。

(2) 「充実感の内容」

実習指導を通してどのようなことから充実感を得たのかを示したのが図3である。

「実習生の姿勢・態度」、「子ども理解」、「自身の指導の再認識」の項目が多かった。「実習生の姿勢・態度」と「子ども理解」は、指導教員が実習生を指導した結果、実習生が実習に対して真摯な取り組みをしたり、子どもとの関わり方が適切に対応できるようになることで、言わば「指導のし甲斐」を感じたことによるものと考えられる。

「自身の指導の再認識」に関しては、実習生への

指導や実習生からの質問への対応を通して自己の日々の指導の在り方や特別支援教育に関する今日の状況や知識を再考する機会になったことによるものと思われる。

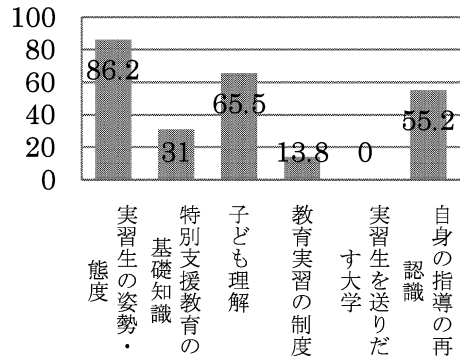


図3 充実感の内容

(3) 「実習生に対する指導内容」

指導教員が実習生にどのような内容を指導したかを示したのが図4である。

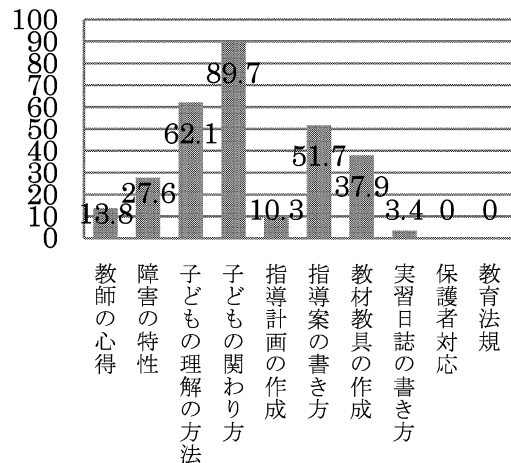


図4 実習生に対する指導内容

指導内容では、「子どもの関わり方」、「子どもの理解の方法」の項目が多かった。実習生の子どもへの指導は直接子どもとの関わりを通して行われる。指導教員は実習生に対して子ども一人一人の実態を説明するところから実習指導が始まり、実習生はそれに基づいて指導することになる。更に、子どもと適切に関わるためには、子どもを理解する必要がある。子どもを理解するための行動観察の仕方、指導資料の解釈について指導したことか

らこれらの項目が多かったものと思われる。

次に多かった項目は、「指導案の書き方」、「教材教具の作成」であった。中でも「指導案の書き方」に関しては、池田ら（2011）の調査研究でも「実習中、辛かった」ことの中で「指導案の作成」が最も多かったことから、学生は指導案の書き方に関しての知識が十分でないことが推察される。そのため、指導教員は指導案作成及び教材教具の作成の指導に多くの時間を費やしたことによるものと思われる。

(4) 「実習前に大学で身につけてほしい項目」

指導教員の立場から実習前に大学でどのような内容を身につけてほしいかを示したのが図5である。

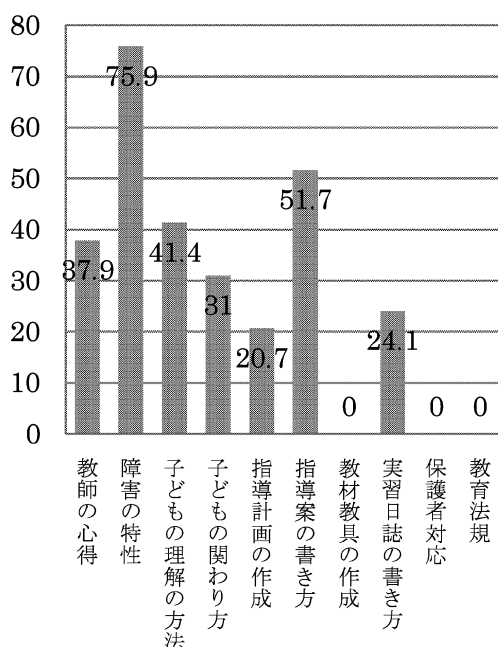


図5 大学で身に付けてほしい内容

多い項目の順から「障害の特性」、「指導案の書き方」、「子どもの理解の方法」、「教師の心得」、「子どもとの関わり方」であった。

子どもの指導に当たっては、その対象を理解することが最も必要なことであり、その意味から「障害の特性」が多かったものと考えられる。「子どもの理解の方法」と「子どもとの関わり方」も多い項目であるが、この2つの項目は、「障害の特性」と関連がある。即ち、「障害の特性」を理解するため

には子どもを理解する方法とあわせて実際に子どもに関わりながら理解するというように3者が関連し合っていると考えられる。履修に当たっては講義、演習、学校参観等を適宜取り入れたカリキュラムの構成が必要と考える。

「指導案の書き方」は2番目に多い項目であった。研究授業のみならずいわゆる略案もふくめて指導案を作成して授業を行うことから、予想以上の時間を費やしたものと思われる。その意味から大学での指導を求めているものと考えられる。

「教師の心得」も多い項目であった。かつ、必要な項目である。このことは、教育職に就こうとする学生にとって最も必要な資質の一つであると考えられる。この資質を培うためには履修科目全般を通じて行うとともに「教師論」のような科目も必要と思われる。

「日誌の書き方」の項目も多かったが、自由記述内容を分析すると「日誌」における誤字・脱字、不適切な表現等が指摘されており、それらの背景には、基礎学力に対する指摘と考えられる。

(5) 教育実習の指導を通して指導教員が「考えたこと、感じたこと」

実習指導を通して指導教員が考えたこと、感じたことに対する自由記述については、①実習に対する意欲・態度に関すること、②実習前のボランティアに関すること、③日誌・指導案の書き方や文章力に関すること、④特別支援学校教諭免許に関すること、⑤自身の指導に関すること、⑥実習前に身につけてほしいこと、⑦大学への要望など内容が多岐にわたっていた。これらについては、特別支援学校における教育実習の指導の改善・充実にむけて今後も調査を続け、調査数を増やして内容の検討をしたい。

5 おわりに

本研究では、指導教員の充実感と実習生への指導、大学への要望等を明らかにするために実習校の指導教員を対象に、アンケート調査を実施した。その結果、以下の知見を得た。

第1は、実習指導において多くの指導教員は校務多忙にも拘わらず、「充実感」を得ていることが明らかになったことである。

第2は、実習生に対する指導では、指導に直結

する「子どもとの関わり方とその理解の方法」と授業づくりのための「指導案の書き方」が多く指導されたことが明らかになったことである。

第3は、実習前に大学で身につけて欲しい内容として、「障害の特性」、「指導案の書き方」、「子ども理解の方法」、「教師の心得」が多かったことが明らかになったことである。

第4は、実習指導を通して指導教員の考えたこと、感じることの内容として、肯定的な視点と改善を要する視点からの記述があり、内容が多岐にわたっていることが明らかになったことである。

今後も継続して研究を行い、内容の深化を図り結果の信頼性を高める必要があると考える。

本研究の実施に当たり、協力いただいた特別支援学校及び指導教員に対して敬意と感謝を表したい。

文献

- 天野真二・丹野眞智俊・鳥飼香代子（1999）「教育実習に関する研究——九州の国立大学教員養成系学部附属学校教員を対象とした質問紙調査——」教育実践研究 第7号, 81-88
- 池田浩明・小川透・武石詔吾（2011）「特別支援学校の教育実習における学生の意識(1)」藤女子大学紀要第II部48号, 125-131
- 磯崎哲夫・磯崎尚子・木原成一郎（2002）「教育実習に対する国立大学付属学校指導教官と教育実習生の意識調査——教育実習におけるメンタリングの可能性を探る——」日本教科教育学研究誌 9, 第25集, 第2号, 21-30
- 坂田花子・東平朋子・江田裕介（2007）「附属特別支援学校における教育実習の在り方について探る——教育実習生への調査を通して——」和歌山大学教育学部実践総合センター紀要 No.17, 111-117
- 坂本学・丹羽克文・下地栄津子・斎藤志保子・河辺正明・山田賢治・山本敬子（2009）「特別支援学校小学部での教育実習における教育実習生に対する指導内容——指導案指導と授業反省会を通して——」三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 29, 47-53
- 高谷有美（2004）「教育実習における授業づくり」についての研究——教育実習生の指導で大切になるものを考える——長崎大学教育実践総合センター紀要, 3, 93-98
- 平田永哲（1980）「養護学校教育実習に関する研究——障害児担当教員養成の在り方に対する現職教師の意識調査——」琉球大学教育学部紀要第二部, 第24集, 252-258
- 藤女子大学人間生活学部保育学科編「障害児教育実習の手引き」
- 北海道私立大学教職課程研究連絡協議会編（2008）「教育実習の手引き」
- 山田朋子（2009）「中学校における発達障害児への支援の在り方と、教育実習生にのぞむこと」教師教育研究 第22号, 49-57